

# 折本良平

ほび あみりょう  
帆曳き網漁の発明者 かすみがうら市



(霞ヶ浦と優雅に走る帆引き船)

天保5年(1834) - 明治45年(1912)。新治郡佐賀村〔かすみがうら市〕生まれ。子どもの頃から農具や養蚕用の道具を改良することに興味をもっていたが、やがて霞ヶ浦での漁業に大きな関心をもつようになる。当時の漁法は大徳網による漁が中心で、その労力はたいへんなものであった。明治10年(1877)、風力によって網を引いて魚をとることを考えたが、現実には様々な問題に直面する。工夫を重ね、明治13年(1880)に舟・帆・網のバランスをとり、風力を利用して、わずか2~3人で多くの収穫をあげる漁法を開発する。その後、この帆曳き舟はたびたび改良される。村の漁民のために大きな業績を残し称えられた。

折本良平は、新治郡佐賀村〔かすみがうら市〕の霞ヶ浦のほとりの農家、折本平兵衛の長男として生まれました。良平は手先がたいへん器用で、ものをつくるのが大好きでした。成長すると、両親とともに農業を営みながら、養蚕に使う「まぶしかご」などを改良したり、農機具の改善にも努めました。しかし、良平は目の前に広がる霞ヶ浦で自由自在に魚をとることができたらという夢をもっていました。

そのころの霞ヶ浦では、おもに大徳網漁という船引きや地引きによる漁法が行われていました。この漁法は沖合に網を張りめぐらせて、それを船で引き寄せる方法と、陸に寄せて魚をとる方法です。しかしこの方法では網が長く、しかも重たいため、たくさん

の人手が必要で、一人一人の分け前が少なかったのです。(一人一人が舟を持って、網を引くことはできないだろうか。そうすれば、もうけが多くなって、みんなの生活ももっともっと楽になる。)

こう思った良平は、舟で網を引く方法をいろいろと考えはじめました。良平が43歳になろうとしていたときです。ある日、良平は湖岸の網小屋で湖をぼんやりと眺めていると、目の前を荷物を積んだ底を浅く平たくした高瀬舟が帆に風をいっぱい受けてゆっくりと通り過ぎていきました。

(これだ。この高瀬舟のように風の力を利用したらどうだろう。風の力なら網が引けるはずだ。よし、高瀬舟に網を引かせてみよう。)

その日から良平の苦心が始まりました。ものに取りつかれたように研究に取り組みます。しかし、風の力で舟が走り出すと、舟の後ろにつけていた網の口がせまくなって魚が入らないのです。良平は考えはじめると、ほかのことは手につかなくなりました。夜になっても寝ない



折本良平翁記念碑 (歩崎観音内)

で考える日が続きました。しだいに農業にも身が入らなくなり、夜になると起き出してはあれこれ考えをめぐらし、昼間は寝床にもぐりこむという生活が続くようになりました。

3年という年月が過ぎた明治13年(1880)、良平の考えた独創的な発明がやっと実を結びました。舟と帆と網のバランスがうまくとれて、風力でゆっくり網を引きましたが、舟は倒れず、良平の家の近くからはるか沖まで舟が走ったのです。網には小魚がたくさん入っていました。良平のほおには涙がとめどなく流れました。長い間の夢が実現したのです。かじをとりやすくするために、帆の下を狭い台形にしたり、網ももめんせまで編んで作り、うきとおもりをつけて網を上げたり下げたり調節できるようにしました。

これまでの大徳網が、一日がかりで数十人の人手を必要としていたのに比べると、この舟は、乗り手が二人か三人で魚とりができ、とれた魚はそっくりその人たちの収入になったのです。

「これが、わしが発明した舟だ。帆に受けた風力で網を引く新式の魚とりだ。」と話し、実演してみせました。村の人たちは帆さばきや網の使い方を良平から習い、さっそく帆曳き舟で漁を始めました。

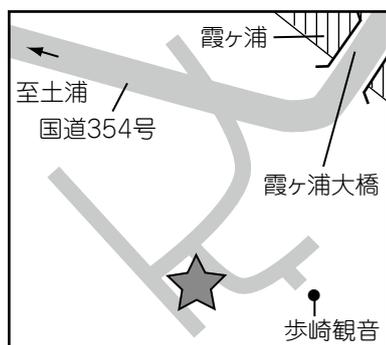
その後、帆曳き舟は改良を重ねられ、帆曳き網で漁業をしていた人たちは、明治45年(1912)、記念碑を建てて、良平を称えました。

## ゆがりのスポットに行ってみよう

### かすみがうら市歴史博物館

所在地 かすみがうら市坂1029

内容 折本良平が考案した帆曳き網漁に関する資料などを展示しています。



### おもな 参考文献

『茨城の先人たち』(茨城県地域学習資料研究会・光文書院・1983)

『20世紀茨城の群像』(茨城新聞社・1999)